

民俗学的経済研究の新たな展開に向けて —家・地域・(地方) 政府の視点から—

辻本 侑生（民間企業勤務）

本発表は、民俗学的視点からの経済研究について、既存の研究蓄積を整理・分析した上で、その新たな展開に向けて必要な方向性等について検討するものである。発表者による整理によると、民俗学的経済研究は、以下の3つの視点から蓄積されている。

第1の視点は生業研究の延長としての、個別産業の経営に着目する研究である。湯澤〔2015〕が指摘している通り、民俗学における「経済」というテーマは、柳田国男や渋沢敬三らによって学問の草創期から対象化されてきているが、具体的な研究潮流としては、農山漁村における生業経済を対象化する「生業研究」の延長として、商家や伝統的な市に対する関心が持たれてきたといえよう。

次に第2の視点は、第1の視点を刷新することを目的として導入された、広義の政治経済システムや消費経済への着目である。門田〔2010〕がいうように、既存の生業研究の対象に拘泥するのではなく、広く文化社会的な現象の流通・消費を、マクロ／ミクロな視角から捉える研究が展開されている。

そして、第3の視点は、地域社会におけるミクロな経済現象の研究である。具体的には講や年中行事・祭礼、冠婚葬祭等に伴って発生する金銭のやり取りに関する分析であり、いわゆる「社会（伝承）研究」の枠内で進められてきたといえよう。

以上の3つの視点による研究は、いずれも興味深い研究蓄積を進めているが、「経済」という枠組みで相互対話・理論形成が可能であるにもかかわらず、そういった観点からの研究動向の整理・課題抽出は十分に行われていない状況にある。

こうした状況を踏まえ、本発表では、民俗学的経済研究の新たな展開に向けて、「経済」を家・地域・(地方) 政府の視点から重層的に捉え、その相互関係を注視していく視点を提示する。家計、地域社会における社会組織や企業等の経営体、基礎自治体や都道府県といった地方政府、そして国家、さらにはグローバル経済といった、スケールの異なるレイヤーが重なり合った経済を捉えていくことで、上記の3つの視点を包含しつつ、隣接分野（経済人類学、社会学、地方自治論、財政学等）とも対話可能な新たな論点が析出されると考える。

門田岳久 2010 「消費/消費社会から捉えなおす日常への視角 人・物・商品の社会的プロセス」

『日本民俗学』262

湯澤規子 2015 「書評 塚原伸治著『老舗の伝統と〈近代〉 家業経営のエスノグラフィー』吉川弘文館」『史境』70